

韓国における多文化家庭の子どもへの保育に関する問題と課題 —保育者に焦点をあてて—

玄 正 煥¹

A study on the problem and assignments of caring and teaching children from multi-cultural family in Korea — Focusing on the day care center teacher —

Jung Hwan, Hyun¹

The purpose of this study is in clarifying the problems of caring and teaching children from multi-cultural family through investigation of day care center teachers. In order to achieve the purpose of this study, a questionnaire that is composed of following five items was held. (1) The degree of knowledge, understanding and interest in caring and teaching for children from multi-cultural family. (2) Difficulties in teaching and caring children from multi-cultural family. (3) The supporting contexts for children from multi-cultural family. (4) The supporting contexts for parents from multi-cultural family. (5) Self-efficacy concerning caring and teaching for children from multi-cultural family. As important results, although teachers have interest in teaching and caring children from multi-cultural family, they also lack of the knowledge and understanding of the children when comparing their interest. Moreover, the knowledge and understanding of the children play a crucial role in recognizing self-efficacy, and the fact that supporting parents is more necessary than the children. The conclusion of this study shows that it is necessary to make an all-out effort to support education for teachers about the knowledge and understanding of multi-culture. In addition, the supporting programs for parents from multi-cultural family are in great needs

Key Words : children and parents from multi-cultural family, day care center teacher, problems and assignments of caring and teaching, Korea.

目 的

韓国社会は、これまで単一民族、単一文化という意識が強かったが、1990年代の初め頃から外国人労働者の流入や国際結婚の増加により、多文化社会になりつつある。この中で、特に国際結婚の増加率は著しく、1990年は4,710件にすぎなかったが、2008年は36,204件（これは、この年の韓国の総結婚件数の11%にあたる）と増加した。それにともない、韓国と異った文化的背景をもつ子ども、いわゆる多文化家庭の子どもも増加している。韓国では、多様な文化的な背景をもつ子どもの受け入れにともない、2000年代から多文化家庭の子どもに関する研究が進

められてきた。

これらの研究の主な内容は、次の3つに分けられる。1つ目は、結婚移民者女性（2006年度の統計庁の発表によると、韓国の国際結婚の72%が外国人女性との結婚である）への暴行や経済的な虐待で夫婦間の葛藤が生じ、それによって子どもの心理的発達に否定的な影響を与える恐れがあることを指摘している研究（ムンシユンヨンク、2007；クチャシユン、2007）である。2つ目は、多文化家庭の子どもの言語や学習の問題に関する研究である。これには多文化家庭の保護者の言語問題が子どもの言語発達の遅れに影響を及ぼしていることを示した研究（チョンウンヒ、2004）、多文化家庭の子どもの言語発達の遅れが学校での学習遂行能力の低下

1 Seoul神学大学校保育学科教授

を招いていることを見出した研究（キムカブション, 2006；オジョンベ, 2005）などがみられる。3つ目は、多文化家庭の子どもの適応問題を扱った研究である。これには多文化家庭の子どもの自我同一性の混乱の問題に関する研究（ジョヨンクダル, 2006；キムビョンスン, 2007）、幼稚園で仲間との遊びができず、一人であることが多いというふうに多文化家庭の子どもの仲間関係を取り上げた研究（ユンカブジョン&コウンキョン, 2006；バクミキョン, 2006）などがみられる。

これらの研究によりわかることは、多文化社会になりつつある韓国の社会において多文化家庭の子どもの問題が多様面で顕れているということである。こういう問題の深刻さに気づいた韓国の政府は、これらの問題を解決するために2006年4月‘女性結婚移民者家族への社会統合支援策’を打ち出したり、教育人的資源部（日本の文部省にあたる）からは‘異文化家庭への教育支援対策’が出されたりしていた（ムンシユンク, 2007）。

しかし、今までの多文化家庭の子どもの問題に関する研究やその支援策は、主に異文化家庭やその子どもの学校での適応の問題や教育の問題に向いており、保育所における多文化家庭の子どもの保育の問題に焦点を当てた研究やその支援策はあまり見られない。それに今までの研究は、異文化家庭の保護者やその子どもの視点を取り入れたものではなく、その対象も主に児童や青少年である。教育人的資源部が2006年出している調査書によると、多文化家庭の子どもの言語発達の遅れや文化的な不適応、消極的な行動、情緒的な障害などの問題の発生率が高く、それにこの子らの17.6%も集団いじめの経験があったということが報告されている。

このような問題は、保育現場においても充分に生じうる問題でもある。キムヒスン（2007）の研究では、2006年度一般家庭の子どもの保育所の利用率は56.8%であるが、多文化家庭の子どもの場合は15.8%にすぎない現状を報告しながら、この問題の背景には保育料の負担という問題のみならず、保育所での子どもの不適応の問題もあることを指摘している。このように韓国の保育所における多文化家庭の子どもの保育はいろいろな問題を抱えていると予想されている。

そこで、玄（2008）は韓国の保育所における多文化家庭の子どもの保育の問題や課題を明ら

かにするため、多文化家庭の保護者を対象に保育所に対する問題意識と期待について調査を行った。その結果、韓国の保育現場においては多文化家庭の保護者やその子どもへの偏見や差別があり、異文化への理解や尊重のできるような環境づくりが必要であること、そして多文化家庭の保護者は育児不安などの問題で悩んでおり、保育所に対して育児情報の提供や保育者との相談、子どもへの特別な配慮を期待していることが明らかになった。

本研究の目的は、先行研究（玄, 2008）で見出されたこれらの問題を保育現場において保育者はどのように対処していくのかを明らかにすることである。この目的を達成するため、本研究では、まず多文化家庭の子ども保育の問題に関する保育者の関心や理解の程度について調べることにした。そして、保育する上で保育者の考えている困難な問題は何であり、それらの問題の改善のために多文化家庭の子ども及び保護者への支援内容は何かを調査することにした。なお、本研究では、多文化家庭の子ども保育に対する保育者の自己効力感についても検討することにした。多文化家庭の子ども保育への保育者の自己効力感は実際の保育行動と密接な関連性があり、多文化家庭の子ども保育への自己効力感を測定する尺度の下位カテゴリーには「異文化の理解と尊重への指導に対する自己効力感」も含まれている。従って、多文化家庭の子ども保育への保育者の自己効力感を調べることは、韓国の多文化家庭の子ども保育の問題への解決策を考える上で、参考となる貴重な資料を提供することができようと考えられる。

最近、韓国において多文化子どもの研究が進められている一方で、保育所において多文化家庭の子どもの受け入れに伴って生じる問題や課題は残されたままである。そこで本研究が設けた目的の達成は、多文化家庭の子ども保育における保育者の問題を明らかにすることができ、そこから韓国における多文化家庭の子ども保育の課題を提案することができると考えられる。

本研究の目的の達成のため、次の5つの検討項目を設けて調査することにした。5つの検討内容は次の通りである。

第1点目は、多文化家庭の子どもの保育に関する保育者の理解や知識、関心の程度について検討する。

第2点目は、多文化家庭の子どもを保育する上で、困難な問題は何かについて検討する。

第3点目は、多文化家庭の子どもへの支援内容は何かについて検討する。

第4点目は、多文化家庭の保護者への支援内容は何かについて検討する。

第5点目は、多文化家庭の子どもの保育に対する保育者の自己効力感について検討する。

方法

調査の対象者

調査の対象者は、S大学で開催された現職の保育者向けの補習教育場に集まった保育者577名（男子4名，女子573名）を対象に集団で調査を行った。保育者の年齢の幅は20～55歳（平均年齢32.9歳，標準偏差7.6），勤務年数の平均は4.2年（標準偏差3.2）であった。

調査の内容及び方法

調査の内容は、5つの検討項目に沿って、次のような内容となっている。①多文化家庭の子どもの保育に関する理解や知識，関心の程度。②多文化家庭の子どもを保育する上で困難な問題。③多文化家庭の子どもへの支援内容。④多文化家庭の保護者への支援内容。⑤多文化家庭の子どもの保育に対する保育者の自己効力感。

調査の方法は、調査項目①の場合は多文化家庭の子どもに関する保育者の理解や知識，関心の程度を4段階で評定した（全然ない—あまりない—ある程度ある—かなりある）。調査項目②，③，④の場合は，質問に対してあらかじめ用意されている選択肢の中で自分の考えに当てはまる内容を選択させる項目もあり，自分の考えを自由記述式で書かせる項目もある。調査項目⑤の場合は，多文化家庭の子どもの保育に対する自己効力感を測定する尺度を用いて調査を行った。この尺度は，全部12質問と3つの下位カテゴリーに構成されている。3つの下位カテゴリーの内容は，次の通りである：多文化家庭の子どもへの教育に対する自己効力感（例，私は多文化家庭の子どもに合った方法で教育を行うことができる），多文化家庭の子どもの仲間関係への支援に対する自己効力感（例，文化的背景が異なっても，互いに尊重し合い仲良くするように子どもたちを指導することができる），異文化の理解と尊重への指導に対する自己効力感（子どもたちが文化的な多様性を受け入れるように指導することができる）。各質問に対して5段階で評定させた（全然そうではない—あまりそうではない—普通である—大体そうであ

る—かなりそうである）。

結果及び考察

検討1：多文化家庭の子どもの保育に関する理解や知識，関心について

577名の保育者を対象に多文化家庭の子どもの保育に関する理解や知識の程度を分析するため，その反応の程度を得点化し（1点，全然ない～4点，かなりある），その平均値を求めた結果，2.34（標準偏差0.54）を表した。一方，多文化家庭の子どもの保育への関心の程度は平均値が2.95（標準偏差.60）であった。これらの結果により，保育者は多文化家庭の子どもの保育への関心はある程度あるものの，それに比べ多文化家庭の子どもの保育に関する理解や知識はやや低いことが明らかになった。

また，多文化家庭の子どもを保育する上で必要な知識や理解に関する情報は，普段どのような方法で手に入れているのかについて調べたところ，「TVや雑誌，本（28.9%）」，「インターネット（22.3%）」などによる収集が多く，保育者に向けた異文化理解への教育やその支援プログラムはほとんど無いのが現状であった。

多文化家庭の子どもを保育する上で保育者が必要な知識や情報を知っていることは重要であり，今後韓国における多文化家庭の子どもの保育問題の改善策を図るのに，保育者らを対象にこれらのことについての教育プログラムや情報提供が必要であると考えられる。

検討2：多文化家庭の子どもを保育する上で困難な問題について

多文化家庭の子どもを保育する上で困難な問題は何かについて調査したところ，<表1>のような結果が出された。ここで，有経験者というのは以前保育所で多文化家庭の子どもの保育を経験したことがあるか，あるいは現在多文化家庭の子どもを保育している保育者である。無経験者は今まで多文化家庭の子どもの保育を経験したことがない保育者である。従って，無経験者の場合は，もし多文化家庭の子どもを保育する場合に予想される問題についての反応である。

577名の保育者を多文化家庭の子ども保育の経験有無（有経験者275名，無経験者302名）にわけて，その反応をみると，<表1>が示すように経験の有無によって大きな違いが見られた。その違いの特徴は大きく3つあり，1つ目

は多文化家庭の子どもの保育の無経験者は、子どもとのコミュニケーションの問題、指導の困難さ、仲間関係などについての心配が大きかったが、有経験者の場合はそれほどではなかったということである。2つ目は、保育所での保育に対する保護者の理解や協力、保護者とのコミュニケーションなどの問題について、無経験者の場合は約23%しか心配を予想していなかったが、有経験者の場合は約50%の保育者も一番困難だった問題として取り上げていたということである。3つ目は、無経験者の4.7%しか「子どもは自らの適応力があるので特に問題がないだろう」と予測していなかったが、有経験者の場合は17.7%も「特に問題がなかった」という反応を示していたということである。

<表1> 無経験者と有経験者の反応

反応の内容	無経験者	有経験者
子どもとのコミュニケーションの問題	29.1%	11.6%
保護者の理解や協力、コミュニケーションの問題	23.1%	49.5%
子どもへの指導の困難さの問題	19.6%	8.2%
仲間関係の問題	18.6%	3.9%
特に問題がない	4.7%	17.7%
その他の問題	4.9%	9.1%
計	100.0%	100.0%

これらの結果により言えることは、無経験者よりも有経験者の方が、保護者の問題の方を深刻に捉える傾向があることが伺える。

本調査の結果は、子どもはわり合いと自分なりの適応力を持っていて、保育者の考えている以上にスムーズに適応しているので、今後保育所における多文化家庭の子どもの保育の問題を考える際には、多文化家庭の保護者への支援により重みをおいた支援が必要ではないかを示唆していると言えよう。

検討3：多文化家庭の子どもの保育への支援内容について

検討3の目的は、保育現場において保育者は多文化家庭の子どもの適応を支援するために普段どのような努力をしているのかについて調べることであった。調査の結果、<表2>のような結果が得られた。この表をみると、多文化家庭の子どもの保育への主な支援は、遊びやその子の慣れた言葉で積極的に働きかけることであ

った。

今度は保育者と多文化家庭の子どもの関係づくりのため、保育者は普段どのような努力をしているのかについて調査した。これについての調査の方法は、自由記述式で保育者の反応を調査した。その結果、総136名の保育者が多様な反応を示し、それらの反応を類似な内容別にまとめると、<表3>のように8つのカテゴリーに分けることができた。ここで注目すべき点は、多文化家庭の子どもの関係づくりのための努力として、保育者は子どもとの積極的な相互作用以外にも「保育者自身が異文化に関する情報の収集やその理解を深めるための努力」、「多文化家庭の子どもへの関心や配慮」などを用いていたということである。

<表2> 多文化家庭の子どもへの主な支援内容

支援の内容	比率
仲間との遊びを勧めている。	20.1%
保護者との相談をよくする。	15.2%
たまにその子が慣れた言葉で話しかける。	14.6%
遊びや相互作用で積極的に働きかける。	13.6%
子ども自ら保育所でよく適応しているので、特に支援することはない。	11.6%
その他	24.9%
計	100.0%

玄(2008)の研究で明らかになった「異文化への理解や尊重のできるような環境づくり」や「多文化家庭の子どもへの特別な配慮」の必要性を考えると、今後多文化家庭の子どもの保育への支援内容として、保育者の「異文化に関する情報の収集やその理解を深めるための努力」や「多文化家庭の子どもへの関心や配慮」は、もっと強調されるべきであると考えられよう。

<表3> 多文化家庭の子どもとの関係づくりのための支援内容

内容	人数
多文化家庭の子どもとの相互作用を積極的に行う	33
相談や対話などによる保護者への支援	17
多文化家庭の子どもの言語問題への支援	16
異文化に関する情報の収集やその理解を深めるための努力	16
多文化家庭の子どもへの関心や配慮	12
保育者や仲間との遊び	12
多文化家庭の子どもの学習的面への指導	11
多文化家庭の子どもの基本的な生活習慣への指導	4
特別な支援なし	15
計	136

検討4：異文化家庭の保護者への支援内容について

異文化家庭の保護者への支援内容は、<表4>に示されたように相談以外にも多様な努力をしていることが見い出された。ところが、ここでみられる主な支援内容は、基本的に保育所での保育活動に対して保護者の理解や積極的な参加を誘導することに焦点を当てている。

<表4> 異文化家庭の保護者への主な支援内容

保護者との相談を積極的に行っている。	28.0%
異文化の保護者の理解できる言語を使う。	20.7%
園の行事や活動への参加を積極的に勧める。	17.2%
連絡手帳や園からのお知らせなどがよく理解できるように手伝う。	16.4%
その他	17.7%
計	100.0%

玄(2008)の研究では、多文化家庭の保護者は育児不安などの問題で悩んでおり、保育所に対して育児情報の提供や保育者との相談、異文化への理解や尊重のできるような環境づくりなどを強く期待しているが明らかとなった。それで、今後の異文化家庭の保護者への支援内容は、保育所の保育指針に保護者が適応できるように支援しながら、保育所への異文化家庭の保護者の期待や欲求、不安などをどのように解消し、支援していくのかにもっと焦点を当てる必要があると言えよう。

検討5：多文化家庭の子どもへの保育に対する保育者の自己効力感について

多文化家庭の子どもへの保育に対する保育者の

自己効力感を分析するために、各質問に対する反応を得点化(1点, 全然そうではない~5点, かなりそうである)し、その平均値と標準偏差を求めた。その結果、自己効力感の全体の平均値は3.91(標準偏差.56)であった。今度は3つの下位カテゴリー別に分析した結果、多文化家庭の子どもへの教育に対する自己効力感3.09(.64)、多文化家庭の子どもとの仲間関係への支援に対する自己効力感3.78(.66)、異文化の理解と尊重への指導に対する自己効力感3.31(.61)をそれぞれ示し、多文化家庭の子どもへの教育効力感が一番低い水準を表した。こういう結果の背景には従来の研究(キムカブション, 2006; オションベ, 2005)からも指摘されていたように多文化家庭の子どもへの言語的な問題があるだろうと考えられる。

<表5> 多文化保育に関する保育者の知識と理解と自己効力感

高群	低群	t 値	
教育への効力感	3.37 (.61)	2.99 (.92)	4.06**
仲間関係の支援への効力感	4.07 (1.14)	3.68 (.66)	4.04**
異文化理解と尊重の指導への効力感	3.56 (.54)	3.18 (.61)	5.74**
全体の自己効力感	3.67 (.64)	3.28 (.58)	5.70**

** $p < .01$

次に、「多文化家庭の子どもへの保育に関する知識や理解の程度」と「多文化家庭の子どもへの保育に対する自己効力感」との関連性について検討するため、その知識や理解の水準が高い保育者(‘かなりある’または‘ある程度ある’と答えた人であり、以下は高群と言う。117名)と低い保育者(‘あまりない’または‘全然ない’と答えた人であり、以下は低群と言う。231名)に分け、この2つの集団間に自己効力感の差異を分析した(577名の中、229名は無応答者である)。その結果、<表5>に示されているように多文化家庭の子どもへの保育に関する知識や理解の水準の高い保育者の方が低い水準の保育者よりすべてのカテゴリーにおいて有意に自己効力感が高かった。

この結果により言えることは、多文化家庭の子どもへの保育に関する知識や理解は多文化家庭の子どもへの保育に対する保育者の自己効力感の

認知に影響を及ぼす重要な要因であり、多文化家庭の子どもの保育問題の改善策を図るのに、保育者を対象に異文化理解への教育プログラムとその情報の提供は効果的な対応策になりうると考えられる。

総括と課題

以上の5つの検討内容についての調査により、結論的に異文化家庭の子どもの保育に対して、次のような提案をすることができよう。1つ目は、異文化子どもの保育に関する理解や知識は、異文化子どもの保育に対する保育者の自己効力感の認知と関連の深い要因であることが明らかになった。しかし、現状は、異文化子どもの保育に必要な情報や知識の提供を目的とした保育者への教育や支援プログラムはほとんど無い状態なので、今後はこれについてより積極的な支援策が必要であると考えられる。2つ目は、多文化家庭の子どもの保育への支援策は、子どもが適応できるように支援ながらも、その保護者への支援にも重みを置いた支援が必要であるということである。3つ目は、多文化家庭の子どもの保育問題を解決する上で、核心となるものは、異文化家庭の子どもやその保護者が韓国の保育環境に適応できるようにどのような支援策が取られるべきなのかということではなく、保育者がいかに異文化家庭の子どもやその保護者を理解や尊重し、彼らの世界に合わせていくことができるかにあると考えられる。

今後の研究は、本研究で明らかとなった「異文化家庭の子どもの保育に対する保育者の意識や対応方式」と、そして玄(2008)で明らかとなった「保護者の感じている問題意識や期待」を並行して考慮し、両側の距離を縮めながら韓国の保育現実に合った多文化家庭の子どもの保育への支援策を模索していく研究が必要であろう。

引用文献

구차순, 2007 결혼이주여성의 다문화가족 적응에 관한 연구. 한국가족복지학, 20, 319-360. (クチャシユン(2007). 結婚移住女性の多文化家族の適応に関する研究, 韓国家族福祉学, 20, 319-360.)

김갑성, 2006. 한국 내 다문화가정의 자녀 교육 실태조사 연구. 서울교육대학교 대학원 석사학위 청구논문. (キムカプシヨン(2006). 韓

国内の多文化家庭の子ども教育実態調査研究, ソウル教育대학교大学院修士論文.)

김병순, 2007 다문화 가정 자녀의 유치원 생활에 관한 문화기술적 연구. 창원대학교 교육대학원 석사학위 청구논문. (キムビヨンスン(2007). 多文化家庭の子どもの幼稚園生活に関する文化記述的研究, ChangWon대학교大学院修士論文.)

김희선, 2007 다문화가족 지원 현황 분석. 한국민족연구원, 현대의 다문화가족, 50-86. (キムヒスン(2007). 多文化家族の支援現況分析, 韓民族研究院, 現代の多文化家族, 50-86.)

교원인적자원부, 2006 보고서: 다문화가정 자녀 교육지원대, 1-27. (教育人的 資源部(2006). 報告書: 多文化家庭の子ども教育支援対策, 1-27.)

문순영, 2007 현행법(안)을 통해 본 국제결혼 여성이주민을 위한 사회적 지원 체계에 대한 탐색적 연구, 여성연, 72(1), 109-142. (ムンシユンヨング(2007). 現行法(案)からみた国際結婚女性移住民のための社会的支援体系についての探索的研究, 女性研究, 72(1), 109-142.)

박미경, 2006 교사를 통해 본 다문화 가정 유아의 특성 및 교사의 어려움. 이화여자대학교 대학원 석사학위 청구논문. (パクミキョン(2006). 教師の観点でみた多文化家庭の幼児の特性及び教師の困難さ, 梨花女子대학교大学院修士論文.)

오성배, 2005 코시안(Kosian) 아동의 성장과 환경에 관한 사례연구. 한국교육, 32(3), 61-83. (オシヨンベ(2005). Kosian兒童の成長と環境に関する事例研究, 韓国教育, 32(3), 61-83.)

윤갑정·고은경, 2006 다문화적 배경을 가진 유아의 한국 유아교육기관에서의 생활에 대한 질적 연구. 유아교육연구, 26(2), 147-168. (ユンカプチヨン&コウンキョン(2006). 多文化的背景の幼児の韓国幼児教育機関での生活に関する質的研究, 幼児教育研究, 26(2), 147-168.)

정은희, 2004 농촌지역 국제결혼 가정 아동의 언어 발달과 언어 환경. 언어치료연구, 13(3), 33-52. (チョンウンヒ(2004). 農村地域の国際結婚家庭の兒童の言語発達と言語環境, 言語治療研究, 13(3), 33-52.)

조영달, 2006 다문화 가정의 자녀 교육 실태
조사 . 교육인적자원부 정책연구과제
2006-이슈 -3. (ジョヨンクダル (2006).
多文化家庭の子ども教育実態調査, 教育人
的資源部の政策研究課題 2006-issue)

-3.)

현정환, 2008 보육시설이용 다문화 가정부
부모 보육에 대한 기대 및 문제의식에
관한 연구, 한국보육학회, 8 (4) , 31-47.
(玄正煥 (2008) . 保育施設利用の多文化家
庭の父母の保育への期待及び問題意識に
関する研究, 韓国保育学会, 8 (4), 31-47.)